

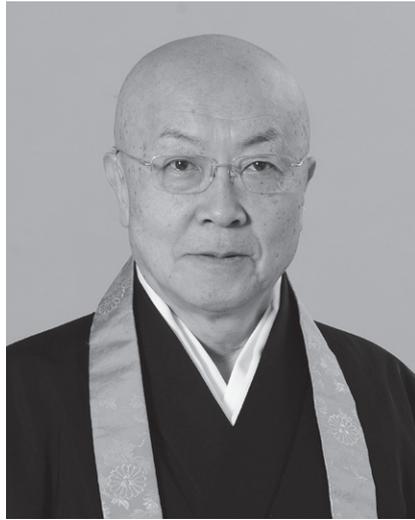


一般社団法人 大日本武徳会

会報 **武徳**

2021.10 秋季号





一般社団法人 大日本武徳会



武徳の実践

濱田 鉄心

この二年間に世界中を襲った新型コロナウイルスパンデミックの中、七月には国内外において数々の波乱と問題点を抱えながらも二〇二〇東京オリンピック・パラリンピックが開催された。直前の意識調査で全国的な感染拡大の危機感が先行し、国民の半分以上が賛同しなかったオリンピック・パラリンピックであったが、全国的な感染者拡大の危機にもかかわらず全ての競技種目が無観客で実施され、政府や組織大会委員会は感染予防対策が後手に回りながらも閉会式まで無事にこぎつけた。この大会祭典についてまだ結論を出すことはできないものの、元よりコロナ禍での世界的レベルのスポーツイベントは無理難題であった。それを押し切って強行に実施した事で生じた負の結果に対する責任は必然的に重い。

しかしながら、非常に困難な条件を前向きに克服し、日本や世界中から参加したオリンピック選手達には勝敗やメダル数の結果に関係なく、大きな賛辞と熱い感謝を述べたい。歴史を遡ると本会が創立された翌年、一八九六年に初めてギリシャ・アテネで開催された近代オリンピックの理念は、フランスのクーベルタン男爵が提唱した人類の自由・平等・博愛の恒久的な精神と真のスポーツマンシップを分かち合う事というスローガンのもと、今日まで脈々と受け継がれてきた。勝敗の結果よりも崇高な人類愛とスポーツ競技を通じて人間が成せる心、体、気技の総合的な完成度を称え合い、尊敬する事が理想であった。今大会において世界の選手達がそれぞれの種目において全身全霊で成し得た貴重な成果はメダルの色や輝きを超越した達成感と感動に包まれていたに違いない。つかの間の勝利よりも、敗北から這い上がる事の重要性を学ぶ為であることがスポーツの教訓として、青少年達に確かな勇氣と自信を与える。勝敗に関係なく選手たちの笑顔と涙と汗は、見る者に比類ない感動と勇氣を与え、ひたすらに目標に向かって諦めずに努力する事の大切さを伝えてくれる。現代オリンピックは、ともすれば商業的、政治的、イデオロギー的な手段として利用され本来のあるべき姿を見失う事があ

る。どんな道においても常に原点に戻り、初心を振り返る事は不可欠である。オリンピック憲章に謳われたスポーツを通じての人類の多様性や調和などは、常に大きな課題として取り組まなければならない。今回のオリンピック・パラリンピックの成果と反省が未来にポジティブな影響をもたらすことを願って止まない。本会の主要趣旨は歴史的に伝統武道の保存継承と武徳の精神を啓蒙することであるが、競技スポーツの世界と価値観を共有している点がある。それは技術や技の修練の過程で常に対峙する最大の難関は、相手に勝つ事ではなくして己自身に打ち勝つ事であり、不撓不屈の精神で克己する事が本当の勝利への道であるという信念である。伝統武道の世界ではそれを通じての強靱な人格の資質を高める教育的な目的論に徹している。礼節を重んじる謙虚さなどは正に日本の伝統文化の美しさと言える。世界の武道家が日本の伝統武道の神髄に魅了されるのは、ともすれば勝利至上主義のスポーツ競技と一線を画する奥の深い道が崇高であるからに他ならない。四年ごとに実施されるオリンピックスポーツと同時に四年ごと開催されてきた本会の世界武徳祭にはそういう意味で歴史的な意義を共有してきた事は忘れてはならない。

本会は、今回のオリンピックでの教訓と感染防止対策などの反省材料を参考に、これからの主催行事について真剣に取り組まなければならない。公衆衛生上の観点から、コロナウイルスの変異株が猛威を振るう状況においては多くの予期せぬリスクが伴う。既に関東地方から全国に及ぶ急激な感染拡大は、正に今、国家が重大な危機に直面していることを意味する。オリンピック行事が終わってからの一カ月間、即ちウイルスの潜伏期間から発症時までの段階が次の新たな感染拡大の領域に入る。この会報が出版される十月中旬頃に国内外がどのような状況にあるかは想像がつかないが、八月から九月にかけての急激な感染拡大に伴い日本全体に多くの懸念材料が山積されていると予測する。国民の集団免疫を高め

る唯一の希望であるワクチン接種状況も重要な鍵になるが、これも不確定である。政府と自治体はコロナウイルスとの共存を模索する中で、国民の命と健康を守る事を最優先にして、医学的科学的見地からどのような方策が適切であるか速やかに判断を下していかなければならない。さらに疲弊した国家経済の立て直しと困窮している多くの国民に、適切で有効な救済策を講じなければならぬ。指導者たる所以は、言葉ではなく実行力で評価されるべきである。

現在、本会は各団体のコロナワクチン接種調査情報を収集し、同時に感染防止対策を踏まえた安全な形での大会行事が可能かどうか入念に検討してきた。しかしながら、この二年間で主催行事が全く実施できない状態であることに加え本会の財政的な圧迫も一段と厳しい事から、総裁陛下をはじめとする多くの会員の有志から温かい寄付金を賜る事で、なんとかこの困難を乗り越える為の努力をする覚悟である。ご支援をいただいた皆様方には、役員一同に代わり心から厚くお礼申し上げます。

本会の八月二十日第八回定例理事会において十月三日開催予定の第二十九回平安神宮古武道奉納演武大会は、京都府を含めた対象地域で緊急事態宣言が九月十二日まで実施されている事や、公衆衛生状況と人流の統制などの感染予防の安全確保が困難なため中止とした。しかしながら十月二日の高段者審査会の現行の緊急事態宣言が解除され、感染防止対策と安全確認の諸般の必須開催条件を満たした場合に限り実施する方向で決議承認した。又緊急事態宣言が延長された場合は、十一月十四日に開催する予定とした。本会の厳格で威厳ある伝統的な審査会において多くの優秀な先生方が受審され、それぞれの武道種目において修練された技が認められ、本会の名譽ある段位称号が授与される事を心から期待したい。未来を予測するのは極めて困難であるが、現状の厳しいコロナ禍の状態がいつまでも続くとは考えられない。いずれ収まる時期は必ずやってくる。それまでの間、本会も堅忍不拔の精神と万全な管理運営体制の下、出来る限りの努力をして武徳の実践を試みなければならないと考える。

中世十三世紀の日本史の中で元寇の危機にさらされていた鎌倉時代、時の執権・北条時宗は、強大な元軍との戦いに悩み、中国から招聘していた無学祖元禪師のもとを訪れた折、無学禪師は一喝、時宗に「莫妄想」と諭した。危機に対して真っ向から直面する今という時に一切の妄想など許されないと悟った時宗は、日本国

を救うための勇気を得られたと伝えられている。現在も未来も我々は常に何らかの危機とリスクを恐れ、それに惑わされる。それらに対して躊躇せず根気よく信念を持つて対処していく事が肝要であり、出来得る万事を尽くして天命を待つ事が我々に課せられた試練である。

最後に、この紙面をお借りして、東伏見慈晃・総裁陛下、桑原兵充副総裁をはじめとする本会会員の皆様のご支援とご協力に対して心から厚くお礼申し上げます。



令和3年秋 高段者審査会予定の武徳殿

大日本武徳会桜並木写真集
Collection of Photos of DNBK Sakura Trees and Promenade



京都市武道センター・旧武徳殿Butokuden Kyoto, Japan



大日本武徳会
前総裁記念モニュメント・旧武徳殿

◆国際部 桜並木

・アメリカ桜プロムナード USA Sakura Promenade



バージニアビーチ市・巨石モニュメントと桜並木 Virginia Beach VA USA

桜プロムナード

虚心流居合剣法 山本 楠城

武徳の精神は国際的には平和・友好・親善の心となって現れます。各国際武徳祭での記念碑たる桜プロムナードの桜が年々大きく成長し、花を見事に咲かす様子を見る度に、厳粛かつ整然と行われた記念石碑徐幕・植樹式、気力・気魄あふれる武道大会の様々なシーンを彷彿と思い出すとともに、それぞれのプロムナードの桜が毎年一本ずつ増植されることに武道を通じての友好・親善への限らない夢とロマンを感じています。

ノーフォーク市・マッカーサー元帥記念館桜
MacArthur Memorial, Norfolk City, Virginia



カナダ桜プロムナード (キングストン市) Kingston City, Canada

さくら咲く

竹田 豊

各国で催す桜プロムナードの記念植樹式に、これまで本部の先生や、国際部の先生そして各国の青少年が多数参加された。

桜は我々にとって親しい樹木だ。桜に関する言葉はいろいろあるが、「さくらさく」の五文字は、様々な場面が想像できる最高の表現方法だと思う。「さくらさく」と答えると結果が分かる。言葉や文字に込める日本人独特の感性だと思う。発すると心地良い、聴くと元気がでる。満開の桜プロムナードは元気を貰えそうだ。



キングストン市・記念石碑 Memorial Plaque Kingston City Canada



英国ベッジベリー国立公園 Bedgebury National Pinetum, UK

英国ベッジベリー国立公園での桜植樹の思い出 心傳流 高島 伸幸

4月に濱田代表理事からベッジベリー国立公園の桑原プロムナードの写真をいただきました。若々しい桜並木が美しい写真です。

国立公園は見たこともない巨木や美しい森を有する公園でした。公園で英国紅茶を楽しんだ後、当時の代表理事、桑原副総裁をはじめ武徳会の未来を託された青少年たちが植樹をする様子を私は見守っていました。後でお土産に買い求めたティータオルが、いつも昨日のここのように思い出させてくれます。

桜の花言葉は幾つか有るようですが、英国では「精神の美」とか。ウイルスに振り回され日常生活や稽古も非日常になり悲観がちな今、作文するうちに先の花言葉を見つけました。また、日英同盟友好親善111周年記念英国武徳祭と植樹に込められた意義を再確認で「武道家精神」を失っているのではと大いに反省しました。



ベッジベリー国立公園・記念石碑



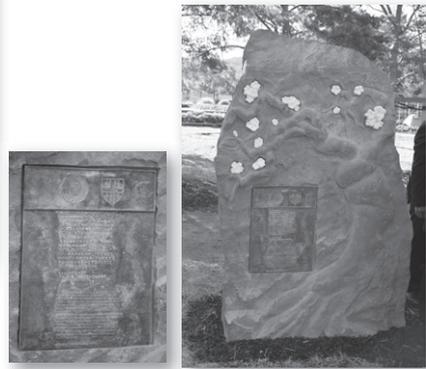
フランス・クレルモンフェラン市・桜プロムナード Clermont Ferrand, France

フランス武徳祭での植樹式

渡邊 佳代子

2017年、日本の桜を仏国クレルモンフェラン市に植樹してから、毎年届く桜便り。鮮やかに咲き誇る桜に、春の訪れを感じます。満開の桜がもたらす高揚感は日本も仏国も変わらないことでしょう。国際交流の歴史を振り返り、日仏関係の重要性を再認識し、日仏友好関係の一層の発展を心から願い、対日理解促進に貢献していきたいと思えます。





クレルモンフェラン市・記念石碑

2017年（平成29年）8月5日

上村 雅彦

フランス国クレルモンフェラン市にて『フランス武徳祭、国際青少年武徳祭』が誠に盛大なる規模にて御開催いただきました。

『桜プロムナード』と『記念石碑』の写真を見ていますとその大会の映像が思い出されます。

大会記念として行われました記念植樹式、この式典も私の想像をはるかに越えた規模にての開催であり驚きの連続でありました。

これら素晴らしい思い出の映像が私の頭の中に鮮やかによみがえって参ります。この時、本当に大変な準備を国際部コニヤード先生はじめフランス支部の皆様方、そしてアメリカ支部の皆様にお世話いただきました。

またアメリカ支部の方々には私達が外出時の細やかなお気遣いと本当に親切なるサポートをいただきまして今でも頭の下がる思いで一杯です。

そして何より開催期間中、朝早くから誠に緻密な事にまで神経を研ぎ澄まして見守り全ての段取りと御指導を頂きました濱田代表理事への感謝は言葉になりません。計り知れない御恩は終生忘れられないものであります。

思い起こしましたら「感謝」ばかりで御座います。本当にありがとう御座いました。



武徳の泉

目次

| | |
|---------------|-------|
| 和歌に顕れた武士道〈前編〉 | 木俣 修 |
| 古人の心得 | 堀 正平 |
| 剣道範士 堀正平先生 | 上村 雅彦 |
| 柔の道四十年 | 戸張 和 |
| | … 20 |
| | … 19 |
| | … 16 |
| | … 13 |

和歌に顕れた武士道

〈前編〉

木 俣 修

命をば軽きにして武士の
道よりおもき道あらめやは

源 致 雄

この歌は花園天皇御撰と伝へられる風雅和歌集の中に見出される一首であって、己が生命を鴻毛のごとく軽く見做しているのが武士の道であるが、この武士道より重い道はないと述べた武士道讃歌である。

命を軽きになすとは死を軽んずるに似ているが、そうではなく、深く死に徹することによって真に死を重んじ真の生命を全うしようとするのである。生と死とは対立したものである。そして一如であると考えるのである。そしてこの生死一如の精神の中に忠誠をとげようとするのである。命を軽きになす

ことは武士道の基幹的精神であるからこの一首はよく武士道の真実を歌い上げたものであると云うことが出来る。然も武士道を歌に詠んだものとしては最初のものである。

だが、この歌が所謂武士道を詠んだものであるとする以上、命を軽きになしてはげむ忠誠の対者は必ずしも、天皇であると云いきることは出来ない。上御一人に帰一し奉るといふ確念はこの歌のどこにもあらわれていないと云ってもよい。勿論対象に打ち込む没我の精神、生死一如の境そのものだけでも崇いものには違いないのであるが、根本に於いて帰一するものに対する確念が欠けていては、正しく「もののふの道」を歌ったものであるとは云い得

ないのである。

平安末期にその萌しを見せ、源頼朝が政権を掌握して以来急速に発達展開を遂げた所謂鎌倉的武士道は、すでに直接受給関係にある主君に対しての道になりさがっていたわけであるから、この時代の武士道讃歌と云うものは正しい国体観の照射を受けたとき、その不純性が直ちに指摘されることになるのである。

われわれははるかに古に遡って正しい武士道、「ものふの道」の精神を確然と示した歌を見つけなければならぬ。万葉集の中にはそうした歌がいくらでもある。

士おのこやも空しかるべき万代に

語り続くべき名は立てずして

山 上 憶 良

天平五年、憶良が病に沈んだ時のなげき歌ではあるが、烈々の志が貫かれている。名を立てると云うことは、単に一身一家の名誉繁栄を期すると云うだけのものではないのであって、朝廷に対する不朽のいさをしを樹て、忠誠

の道をまつとうせんとする志の表明である。

まますらは名をし立つべし

後の世に

聞きつぐ人も語りつぐがね

大伴家持

さきの憶良の歌に対して、後に唱和した歌であるが、憶良の志に呼応して更にそれを強調している。この名を惜む精神の前には自らの個の生命のごときは全く問題ではなかったのであり、命を軽きになすことは紛れもなくすめらべにひたむきの忠誠をはげむこと以外の何物でもなかったのである。家持は更に一族をさすために長歌を詠んでいる。

久方の 天の戸開き 高千穂の けにあもりし 天皇の 神の御代より はじゆみを 手にぎりもたし
 まかご矢を たばさみそへて おほ久米の ますらたけをを 先に立てゆぎ取りおほせ 山河を いはねさくみて ふみとほり 国まぎしつちはやぶる 神をことむけ まつろ

へぬ 人も和し はき清め 仕へ奉りて あきつ島 大和国の 檣原の 畝傍の宮に宮柱 太しり立て
 天の下 治しめける 天皇の 天の日嗣と つぎて来る 君の御世々々かくさはぬ あかきころを すめらべに きはめつくして 仕へくる祖のつかさと ことだてて きづけたまへる うみのこの いやつぎつぎに 見る人の 語りつぎでて 聞く人の かがみにせむと あたらしき きよきその名ぞ おほろかに 心おもひて むなごとも 祖の名絶つな 大伴の氏と名に 負へる ますらをのとも

反歌

敷島の倭の国に明らけき
 名に負ふ伴の緒ころつとめよ
 剣たちいよよ研ぐべし古ゆ
 清けく、負ひて来にしその名ぞ
 これを見ると大伴氏が、当時の武官としてすめらべの守りに就き、武事にはげみ、ころたましひを錬り鍛へ、その家の名を失はざらむことを固く期

していたことが明らかに解る。この家を重んずる精神の根本は、天皇に対し奉って忠誠の道を全うすること以外ではなかったのである。

人口に膾炙し尽されているから詳しく云うこともないが、家持の長歌中の一節「海ゆかば水漬く屍 山ゆかば草むす屍 大君の辺にこそ死なめかへりみはせじ」こそ真にもものふの道の本質を正面から歌いあげたものである。

足柄の み坂た廻り 顧みず 吾は越え行く 荒男も 立しや憚る 不破の関 越えて吾は行く 馬の蹄 筑紫の崎に 留り居て 吾は齋はむ 諸は幸くと申す帰り来までに

倭文部可良磨

ものふの道は必ずしも家持のような武官として立っていたもののみが口にし実践したものではなかったことは、この防人となった東国の無名の一草莽の歌に示された「顧みず」の精神に見て明らかにされると思う。ものふの道は本来、武人のみの道ではなく、広く臣の道であったのである。

もののふの臣のをとこは大王のおほきみ

まけのまにまに

聞くといふものぞ

笠 金 村

「大船に真かぢしじ貫き大王の ことかしこみ磯みするかも」(石上乙麻呂)と云う歌に和へた歌であるが、武人として朝廷に仕へた臣たる男の心得を謹厳な口調を以て説いたものである。「おほきみのまけのまにまに」と云う精神はもののふの道に於いて重大なものであつて、絶対不動、永遠に澄み明る根本精神である。

大君の命かしこみ磯に触り

海原渡る父母を置きて

文部人麻呂

大君の命かしこみ天の共た

真寡まがか渡らむ長けこの夜を

大伴部子羊

今日よりは顧みなくて大君の

しこの御楯と出で立つ吾は

今奉部与曾布

などは防人の歌であるが、「大君の命かしこみ」と云う精神は、さきの金

村の歌に於ける「おほきみのまけのまにまに」と云う精神と相通ふものであつて、もののふの道を歌った歌の原郷はまたこれら防人歌の上にもはつきりと求め得るのである。

平安朝時代は時代的に国家的な精神が影をひそめた時代であつた。殊にものふの道に対する自覚などは殆んど表面にあらわれることがなかつた。古今和歌集以後の勅撰和歌集の上に見ても、個性的精神への自覚は顕著に認められるけれども、忠君の精神のごときは、僅かに賀の歌、神祇に関する歌などの上に見られるにとどまっている。忠君の精神とても、君が代の千代八千代をこひねがふと云う風の類型的な歌が主要な部分をなして、臣の道の実践、もののふの道の自覚に発した忠君の志を力強く歌ったものなどは全然見つけることは出来ないのである。

山はさけ海はあせなむ世なりとも

君にふた心わがあらめやも

源 実 朝

おほ君の勅をかしこみ父母に

心はわくとも人にいはめやも

ひむがしの国に我をれば朝日さす

菟はこ姑射やの山のかげとなりనికి

金槐和歌集に見える歌で「太上天皇

御書下預時」と云う詞書がある。後鳥

羽上皇に奏し奉った歌で、忠君のまこ

とを誓った歌として高名のものである。

「一心あらめやも」は云うまでも

なく帰一を中心を天皇に置くと云う精

神の披瀝に外ならない。鎌倉幕府に全

く尊皇の精神がなかつたとは云われな

い。然しその尊皇は関東の武運の長久

を祈念する為めの打算に発したもので

あつて、真の忠誠の志とは根本に於い

て大きな逕庭があつたのである。当時

幕府の責任者であつた実朝が、そうし

た立場から全く抜け出して独り尊皇の

純情を持ち、これを歌つたと云うこと

は注目すべきことである。

(後編は二〇二二年春号に掲載)

※先達の原稿は、発行当初のまま掲載させて
いただきました。

(昭和四十七年二月十日発行)

古
人
の
心
得

範士 堀 正 平

古人の心得

爰に記す古人の心得なるものは、時世と共に甚しく変化して、今日より見れば余程変な感がするかも知れぬ、然しながら如何に形式は変化しても、心持は何時までも決して変らぬものである。

故に形式は時世によって取捨して、此心持を適宜に応用すべきである。

水かがみ序

夫武士は技術多端なりといえども、柔剛強弱四つの外を出ず、是をしらざるものは多く、此理を学び得るものは少し、されば水のひききにつくがごとく大剛の名ある人と言えども、ゆるみをうつにうたずという事なし、よろづのわざはひは氣のゆるみより出くる事を知るべし、其ゆるみと言は、なづみてかたよる所にあ

る、是みな意の為に基本をうしなうが故也、しかはあれども、てだてと言う事あれば敵にはかられざらん事をしらしめんとして、人をはかる品々をしるしあつめて、後のならへるものたすけとするものならし。

夜中心許なくをもふ道を行時は、人に当りて能ほどの石を袖に入てもつべし、是は氣づかひにをもう所へ右の石を打ちて見るに必ず体をあらわす者也。案内を知らざる川を越ゆ時は、川上へすぢかへにこすものなり。

雨天かきくもり行先も見へざるとき、足元に白き物其外何によらず眼にかかる物有というとも、ひらうべからず、心得なく是をひらえば目じるしになってきらるる事多し、是は刀を抜き鞘にてはね返して取るべし

山だちに逢申時者、先我心をよくをさめて臆する事なく足はやに通る、扱て、其二三里が間前後左右より来る人にならず心をゆるすべからず。先定りたる山だちというは、中間六人のもの也、一人は出て残る五人は能所の草に臥也、又無心元一道ばたに病人有つてくるしげなる声にて薬など所望するものあらば、心得て近付くべからず。又はくちうにも知らざるもの道づれいぶかし。

夜中事ありてたちのかんと思ふとき東西南北をも不見明いかがせんとをもうときは流れを尋出し、其川上へのぼればかならず山有もの也山中へ入ては高所よりひきき所を見おろし居て、たいまつなど持て尋來る体にて道路を知べし。兎角ふかく思案あるべき所也。さて追手間なく來りのがれがたくをもう時は、刀の小尻を少切いきの出るほど穴を明け、こひ口を口にくわえて水底にしづみ身をかくし、刀脇指にても小刀にても水底にさし込、是を力に取付いる也。手など負たる時も流の中を行たるがよき也、是はのりをとめら

れぬ用心なり。又雪降りたる時者は、きものを後先にはき杖を左につき、流の中に入れて行べし、是跡をとめられぬためなり。

旅にて気づかひなる宿とをもう所にては、其家の後に出て要害をよく見置くべし、是は火事夜盗などの入たる時の為なり。扱家の内にて床縁天井の落入てやはらかなる所に心を付、たたみをあげて是を見置べし、寝所に入ては灯火の有内に我大小荷物を、勝手悪敷所に置き、火消て後勝手の能方へ取なをし、枕はいかにもしにくき枕をすべし。中略。戸尻にきりもみしたるもよし。又高きに登る足掛にもなる。

ちようちんを持する事、我より先へ為し持たるは悪し、我左の方大小より二尺ばかりあとに為し持たるよし、此時は前後左右ともに能見る物也。

左の手を懐に入れて打物をかたに、成程ぬかりたる体にもてなし来るものあらば、昼夜ともに心をゆるすべからず。夜は黒き反古を鞆のように袋にこしらへ、しら刃を包かたよりすぐに打事有もの也。昼はをりかね

を我髪のわけに懸て、右の手計りにて抜うち左の手を懐中しながら討事有。さて其所はや四五町も行過ぎぬれば必ず心ゆるみ、前後左右より来る人を我かたうどのようにをもち平に物語などしかけ心ゆるすもの也、其時彼もの時分を窺反古にて包たる刀にて打てはづる事なし。

我家の内へ忍入たるものを知て、とりめ申には我名呼ぶべし。

我屋敷のうちへ大勢夜盗来る時、先内に火をとす事大に悪し、人少くしてふせがんとをもう時はささやき声などして聞せ、きらんと思はば夜盗爰より忍び入べきと思う口に、ほそ引を高さ四五寸計りに張、手ごろな物を楯にもち打物をしやにとりて払切にすべし。又内に火をともしたる時は外の聞き所より内を見るに能見へて悪し故に忍びと言は火を持事第一なり。

忍人来るには不_レ知しても必我心に覚ある物也、其時心得て気つかいすべし。忍人も亦ちくるいの来るようにする事あり、時にちくるいと思うべからず、忍びというは色々の手

立有といへり。又遠所にかすかにせきなどする事あらば必ず近所に人ありと知るべし、近所にてするせきを遠所にてするようきこゆる習有、彼者忍入時は近所に堀川池のあれば其ふちに能ほどの石を置て忍入もの也、是は出合追出る時右の石を彼の水の中のうち込みにくべきたくみなり。是等の事心得て氣をとらるる事なかれ。

忍人内へ入たるやさしがしするには、刀を抜懸切先を二三寸ほど鞆のうちにてのこし下緒をのべて其先を我帯に付、左の手に得物をたてに持ち身をかこひさがすべし。中略、忍者我をたづぬと思へば能心を納めいりの中に入臥て敵のゆるみを窺みてはづす事有べし、扱いりり中に身をかくす事起合るものども常に見置たる故に彼いろりを皆人除けて通る物也、是を心得なく火などともして近寄きらるる事有べし。

追出時は、諸事に心をつくる事肝要なり。彼もの大事に思て忍入時は入口に高さ四五寸計にほそ引を張申か、のれんの有ば上より下へすだれ

のごとく切さき下四五寸残し置也。

また繩すだれなれば左右のはづれを取て結び置事有。さて次々の間に段などあれば伏して身をそばめ、彼段よりおる所を斬事有、此行を心得べし。急に追懸らるる時其道の通にひしとい物のを撒事有、此ひし足に踏立てば一足も行事なるべからず。又門を出る時後手に尻戸を引物立也、追出るものは是を明むとするに五間先行過る物也、扱追懸らるるも、追出るにも習有是は何れもわざ也。

忍び忍びに鳥類、ちく類のまねをもしならう事有、忍びのとき入事多し、昔もろこしかん国の関をも鳥のなく音にはかられて通したるためしあり。

城乗の時へいを越には、刀を擗に立懸下緒の先を取てむすび足くびにかけ鐔を踏でうで木に取付刀を取て腰に指越すべし。若其擗高くして棟木に取付事難^レ成は彼きりを取り出し打立て越すべし。又取かぎを懸てこしたるもよし。とかく、擗高くして越がたき時は越べき以前に、とりかぎより二尺ばかり繩を残し我後の帯

に引通し其ま後より肩をこさし前の帯に繩の先を留てこすべし。うで

木に取付し彼かぎを、うで木に懸て我身を心安つかうべし。又をり候時は常の如く得習心を能納て下に重みを付かぎを能所にかけて右の繩をくりて下りたるもよし。又かのきりをもみ立是を力に取付ふらりと下り片手をはなし足ばかりに心を付地きわ三尺計よとをもう所にて飛べし。さて地に着よと覚ゆる時態ところび二つ三つかへるべし。必ず高き所より飛事悪事なり。飛むと思へば取上かみつりに成て下軽く成故也、此時は身を強打事無疑此習を知ずして下る事計覚えはや六尺の程有ばころばんと心得たる人は身を打事すくなし。

夜中大勢出座有て口論に及所に、其座敷の人数皆一本になり、我一人のとき誰を相手にもとるべき様なれば命を捨てても多ぜひに無勢なれば可^レ叶共不^レ覚とも、武士の道にはづるる事も成がたし、いかがせんとももう時は、先我心をよく納め死をやすくして体を陰にして内に陽を含み其座の勝手のようにすを能見置て行を

以て討つべし、其手立と云は心静に人々の氣の付かざるように灯火の方により、時分を能伺立より打物に手をかけんと思ふ時足にて灯火をけかへすか、又蠟燭の時はしんを取るようにもてなし火を消し、其燭壺を楯にして身をかこひ其座の勝手兼て見置たる所に身をそばめ、節に当り分別して身をしつみくはづして切なり、又伏して切たるもよし、何れも太刀をしやに取なぐりたる太刀にてすぐに払べし、此手立に逢うては大剛の者大勢有と云共誠を失い悉く散乱して、闇き故同士打有物也。

我に覚なくして心に気づかい有時はしたしき者など伴はんというとも必ず禁足あるべし。我命に大事の時心うかざるもの也、此時はころへてけん脈をとるべし其取様は右の手に我左の脈を取、左の手にて右の手の脈を取合見るに一拍子打はしるしからず。……以下略す。

※先達の原稿は、発行当初のまま掲載させていただきます。

昭和三十六年七月十日発行

柔の道四十年

戸張古武道研究所

柔道範士戸張和



戸張滝三郎師範 (大正九年三井撮影)

半世紀前に修業した当時の驚き苦しみ、そして嬉しさ等を織り交ぜて思い出すままに書き綴りました。目下修業中の青少年の方々の参考の一端にでもお役にたてば幸甚に存じます。

一昨年三十三回忌を済せた夫であり、師でもあった戸張滝三郎は

天神真揚流免許皆伝を受けた頃には、講道館柔道も進展し天覧試合の光栄にも浴したとのこと、尚戸張は剣道、水泳にも達し鬼戸張の異名で世間に風評されたとの事である。其の間幾十年に亘るエピソードやトラブルの数々を背負って海外遠征の四、五年は一にも二にも「柔柔」で夜が明けたと云う。種々のロマンスは後日食前食後によく聴かされた笑い話でもあり又訓話でもあった。戸張が家庭に落ち着いた頃には、奥さんが亡くなられた後で、淋しく一人四天王寺

前で分家戸主として書生とわび住居であった。私の叔父叔母は戸張とは知己の間であり、失敗勝で悲しみやの私を心配し、両親とも相談の上で戸張に鍛えて貰うように頼みこみました。それが実つて此の道四十年「柔」一途に歩む事になった。それは実に戸張の激励が身に沁えたからです。

戸張の言葉に「わしは今日迄門人へ免許皆伝の機会がなかったが君が生まれ変わった心算で朝夕励めば私が長年修得した技を五年で伝授して見せる。どうだやる気があるか」と厳然として言はれた時、圧倒され何も考える間とてなく、唯「お願いします」と言ってしまう。

一方この鬼先生と一緒にいつ迄稽古してゆけるか不安でもあり、又、興味もあり、びく付ながらも大船に乗った様な安心感もあった。私は色黒で無口でやせっぽち、それに人の機嫌はとれなかったが、負け惜みが強く記憶力は悪くなかったが斑気であった。こんな女を一人前の人間に育成して下さい。戸張には感謝せずにはおられない。勉強の一例「一日一時間暗記す

る、課目は人体図」から

一日目、暗記成功。

迷走神経・背髄神経・交感神経
副交感神経・大脳・小脳・肺臓・心臓・肝臓・十二指腸・膀胱・胃
脾臓・腎臓・大腸・直腸・腸間脳
中脳・延髄・頸・胸・腰椎・二十三椎等々

これらがゆく／＼活法、当身に
関係あり絶対暗記せねばならぬと
勉強の皮切りだった。今でも口走
っている名称である。いよ／＼今
日から決った生活が始まる。

朝六時起床、夜は十時消灯。こ
の間のスケジュールは左の通り。
起床洗顔、身仕度、大阪武徳殿
支部(天王寺公園内)で朝稽古の一
時間は勿論戸張と共に、稽古後は
近くのラジウム温泉にて汗を流し
帰宅、九時朝食、食後車にて堂ビル
出張所に向い十四時から十七時迄
患者治療、十八時帰宅、二十時迄宅
患者治療、夕食後一時間技の解説
を受ける。走馬灯の様に春夏秋冬
一ヶ年は目まぐるように過ぎる。

受身の稽古で足が紫色に腫れ上
っていたのも二、三ヶ月で直り、余
り捻挫もしなくなった。併し、朝
締業の稽古があった時は、一日中
はつきりしない日もあった。おち
るのは苦しくないが、後を引くよ
うに体がだるかった。早く戸張を
締められるようになる日が待遠し
かった。

或日突然稽古を休ませて下さい
と願ひ出た。いわゆる戸張流戦争
中止の日、これが逆に私を釘付け

る事になった。堅い約束をしなが
ら一年で弱音をばく私、戸張にす
れば今日まで指導され、これから
と云う時に意気を抜かれる事は耐
えられなかったのだと思うのに、
よろしい幾日でも休養しなさいと。
そして好きな事をして遊んで来な
さいと、沢山のお小遣を頂いた。
これにはさすがの私も青菜に塩で
しかられると思ひその時は、「やめ
させて頂きます」と言うつもりが
逆になってしまいました。戸張の
戦法は勝ち、私はしよけておとな
しく休養しました。

或る日大きな宝石を見せて、休
養中はこれをはめていなさい「気
に入らねば捨てなさい」と出来な
い事を云はれまるで子供扱いでし
た。私はお礼をいいたまつて大切
に仕舞っておきました。そして、
早く元気になって又稽古に励みま
すと、手紙を書いて先生の机の上
にのせておいた。次の日私を呼び
「休養がとれば結婚しよう」全
く不意打の挑戦が目がくら／＼し
たが「考えます」と静かに答えた
戸張は物事の決定は早い人だが、
負け惜しみの強い私でも即答は出
来ず色々とその間事情はありまし
たが、成る様になれと翌年春に結
婚する事に決心致しました。

戸張は師思いで、嘉納先生御生
存中は毎日新聞社に柔連の事務所
を置き何かとお手伝いをし、北区
堂ビル前の「ひさご屋旅館」を先
生の常宿とし、先生の別荘が紀州
の加太に在り私を紹介する為に加

大まで同伴され、嘉納先生等と御
一緒に撮影した写真は今でも大切
に保存しております。又、其の時



嘉納治五郎先生 戸張滝三郎と和夫妻

書いて下さった「盡己」の額は現
在堂島の道場に掲げられています
思師嘉納先生を称える種々の物語
りにも師を敬う心が頭われ頭の下
る事も屢々でした。

夫になった戸張ですが、師でも
あり一生此の師である夫が妻であ
り弟子でもある私を一生涯育んで
呉れる様にと願う次第でした。一
ヶ年の修業を無駄にしたいくない、
それはかりが念頭から放れなかつ
た、でも私も人なみに女子を出産
しました。戸張滝三郎の滝をとつ
て滝子と名付け、それこそ蝶よ花
よと下におかぬように育てる間に
一年は夢のように過ぎました。併
し、手が抜けるようになると、や
はり柔がやりたかった。そこで或
る日戸張に頼みまして、今度は

昭和52年7月18日

大日本武徳会会報

夏季号 (30)

じける事なく一生かけてぼつ／＼
努力修業しますと誓いました。
戸張は四天王寺の本宅に新らし
く道場を造ってくれたので、武徳
殿は稽古に行かず家で出来る様
になったので大変嬉しかった。そ
れからは例の通り毎日／＼堂ビル
出張所に通い、夜は稽古と、滝子
が幼稚園に行く迄続きました。戸
張は和歌を解す事を勧めたが、私
の一番嫌いな種目でしたが、やら
ねばならぬと勉めました。

よ
・捕られては水に浮木の身をもて
風にまかせつ浪にまかせつ
・月見んと思ふ山路に登れども
迷ふ麓に夜は明にけり
・遠くの道をいそいで足元の
石につまづくなりのおかしさ
・わけ登る麓の道は多けれど
同じ高嶺の月を見なん
此の四種の歌を技に励む足掛り
にせよとの事で、私は私なりに励
みました。出張所へ行く車の中
も色々の事を教えられた。柔の技
も一年一年と数が増して行つた。
その技の名称を挙げれば

立合之事 (天神真揚流地之卷)
蹴返・面影・諸手碎・杉倒・大外
落・浪分・猿猴附身・手矩捕・両
非・天狗勝
居捕之事
後鉸・脇鉸・後捕・片羽縮・矢筈
突掛・無二釵・龍虎・暫心目付・
見刀圍

直之位・添捕・御前捕・袖車・飛
違・抜刃目附・鎧返・両手捕・
壁添・後捕

立合之事 (天神真揚流地之卷一)
行違・突掛・引落・両胸捕・連拍
子・共車・衣被・襟投手髪捕・後
捕
流水哉 (天神真揚流地之卷)
捨身捕・引込捨身・横捨身・膝車
戸板返・菊足・足鍼・横挫・内菊
片羽折

柔術経絡 (人之卷) 当身技 可秘
松風・村雨・雷・月影・雁下
明星・烏兔・水月

柔術の技の種類 (重なる技) 可秘
逆技・絞技・当技・関節技・蹴技
当身活法の修業行程
週に一回は当身、又活法の稽古
があり、活法にも当身技にも先づ
相手がある。縮、又当身にて仮死
状態になって貰う。今で云うアル
バイトが入用なのです。門人が修
業を重ねて自分等が教えて貰うに
は、絞められ、当てられして互い
に研究し教えられるのだが、何時
も其の様なベテラン門人ばかり並
んで居る故ではないから従つてバ
イトを頼む。誰でも云う事だが、
縮は「スーと夢心地で苦しくない」
と、だが当身はそうはいかない。

でも、戸張の当身は相手に余り苦
しみを感じさせない様だ。此の壺
がピッタリ分かる様になるには何
年かかるであろうか、戸張は云つ
た「煩惱を捨て相手と一体になり
呼吸を計り、各所の壺をねらつて
瞬間にスキのある一ヶ所に当てる
事」と、今倒れた者が活法にて、
息を吹返し目を明け飛び起き、あ
と二、三步よろ／＼と歩む姿を見
ると私は、戸張は鶴匠だ！、人間
を使う鶴匠だ！……

いつも此の瞬間は私の二番目の
嫌な課目だった。一体幾人の体を
からねば満足な活法が出来る様
になるだろうか、簡単な首締でさえ
鼻水が出すぎたり、相手が畳又肩
等をたたき合図しても秒数を長引
かせて放した時、白目が充血して
半年余りも直らぬ時もある。心得
ねばならぬと思つた。或る日バ
イトにいた私の活法が成功した。
稽古が終つて帰る時、私は其の
相手に云つてみた「貴方は死(仮
死)んだら生きかされたりする仕事
に良く来ますね」と、彼は云つた
「でも帰りには血の出る様なビフ
テキが食べられるから」と、この
返事には私は堪えられなく耳に残
つて居る言葉の一つである。戸張
が五十年以上の修業で修得した技
を私がどうして僅か五年位で修得
できるのか、時々一人になった時
考えるが、やはりやらねばならな
いのだと自分に云いきかせた。考
えていても何も出来ない。先生に
教えられる迄もなく、見ても覚え

戸張の技を盗まねばと懸命に努力
した。

戸張流柔術活法
磯又右衛門先生活法
嘉納治五郎先生活法
以上の内私は、戸張流柔術活法
が好きだ。研究の結果、相手が余
り苦しまぬ事が第一条件です。磯
先生からも嘉納先生からも印可あ
る程の戸張の活法は天下第一なのだ

多年日本伝戸張流柔術ノ修業ニ
精力ヲ尽シ業精熟ニ至レリ依テ四
種令相伝畢向後益々研磨シ斯道ニ
於テ可期為先達者也
嘉納先生から戸張滝三郎へ
右者当流之秘巻厚因熱心令相伝
堅他見他言有間敷者也
戸張流柔術活法之卷(四種)
誘活法 口伝
襟活法 口伝
陰囊活法 口伝
物活法

戸張が最後に受けてくれた京都
武徳殿での形は、居捕十五本、立合
十五本で、あの大きな体が宙に舞
う姿を第三者になつて私は見学し
たかった。
今から思うと戸張は外に興味
がないのか、暇さえあれば若い時
柔の話題だった。柔術の綱をすつ
ぱり被つて、広く多い門人にも、
免許皆伝を許さず一人悦に入り海
外遠征で各国から貰つたワッペン
の自慢話が好きだった。
誓文記に記入させられた以外の
行動は破門となるのだ。規則も厳

しい。忘れられない昭和十八年始
突然倒れ入院し、二ヶ月位で退院
されたが半年程後に又入院、天下
の鬼戸張も病気には勝てなかった
親切な人から伺つて高貴葉タイマ
イ(亀)、赤道直下に棲むサンゴ
に付いている虫を常食としている
亀の生血も飲んで貰つたが、昭和
十八年十二月五日遂に逝去された。
翌年は戦災で本宅全焼、日頃か
ら柔関係の書類一切は身辺から放
すなと云われていたので、虎の巻
一切と正宗(作り変えて杖になつ
ていた)を手放さないうで堂ビル出
張所に逃れた。二階の出張所を地
下室に移し、道場も住いも一つに

して今日まで地下で三十三年を過
した。今は両親も亡くなり滝子も
戸張の没後間もなく亡くなり一匹
狼だが、死に物狂いで七年間やつ
てきた戸張との稽古は今役にたつ
ている。何時まで続くか分らない
が、やれるところ迄やるつもりで
す。でも、明日の事は分らない。

※先達の原稿は、発行当初のまま掲載させていただきました。
(昭和五十一年七月十八日発行)



大阪府柔連会長より表彰状を受く

夏季稽古会の開催結果

一心無双流居合道剣心会
総師範

山田 文典

長期化するコロナ禍のため不安路と混乱が世界を覆う中、当会は、恒例の夏季強化合宿を昨年にかけて中止致しました。

しかし、コロナ禍におきましても稽古を継続しており、今年も若干の入門者があり居合道を愛する当会各道場剣士から、稽古会の開催希望が多く寄せられ、開催することといたしました。

今年は、午前中を高段者、午後は初心者、入門希望者の部に分けて、マスク着装、密を避け、換気、消毒、特に猛暑の中、給水、休憩をこまめにとることを励行しました。

実施場所は、滋賀県琵琶湖西側にあります木戸市民センターで、もともと同所は、旧志賀町役場跡を活用した施設でした。今回開催した高天井の大会議室は、町議会が開催されていた所で立派な設備がありました。

今回は、千葉剣心会からも三名の参加もあり、滋賀・京都各道場から多くが集まり、午前中は、奥居合の修練、午後は、基本技「一心」の稽古、組居合、紙テープを活用した相互稽古、昇段級模擬審査など熱心に取り組みました。

参加者からは、「思いつきり刀を振られて良かった。コロナ対策がしっかりされていて安心して修練できた」等の声が聞かれ充実した時を過ごすことが出来ました。

コロナ禍は、しばらく続くと思われますが、対策を講じつつ粛々と修練に取り組んで参りたいと決意も新たにいたしました。



稽古風景（午前の部：高段者を対象とした奥居合の稽古）

一心無双流試斬研究会報告

一心無双流居合道剣心会 大津道場
師範代

中野 秀人

去る五月四日、当流長浜道場に二十名近くの当流剣士が集い、試斬研究会を実施いたしました。手洗いの励行、ソーシャルディスタンス等にしつかり留意し、記念撮影時を除いては常時マスクを着用するといった諸々のコロナ感染対策を万全とした上での開催となりました。

そもそも当流においては、巻畳等を台に据え、これを斬るという業が伝承されてきた訳ではありません。しかしながら、手の内、刃筋という運剣の基礎ができているのか否か、明瞭に確認できることから、定期的には有志による試斬研究会を行ってききました。今回は、大型連休中でもあり、流派剣士の半数近くが集まる研究会となりました。

試斬稽古では、目の前の物体を斬つてやるという気負い等のために、往々にして普段認識されにくい悪癖が出やすくなるのではないかと思います。目標物があろうがなかるうが、同じように心と身体を運用すべきなのは当然のはずですが簡単ではなく、非常に勉強になります。また、当流において先生方や諸先輩から受けてきた形稽古の様々な教えについて、目標物を斬つてみることで「成程、こういうことであつたか」とより深い理解を得ることもあります。

今回の試斬研究会は、初めて巻畳を斬る剣士もあり、また、難度の高い業をあたりまえのようにこなす剣士もあり、修行の進み具合は様々ではありますが、それぞれに成果や課題を得ることができ、大変意義深いものとなりました。

当流では、今回取り上げた試斬、さらには、木剣等を使用した二名以上による組居合について、併せて修練を積むことが、宗家から受け継いだ居合形を真に修めるために重要であると考えています。今後もうこうした稽古を継続し、流派一門をあげて研鑽を積んでいく所存です。



戸津説法

上村 雅彦

私はこの度、沖繩剛柔流空手道協会 順栄館 止観道場 館長で比叡山「観樹院」の御住職でも有られます 上野良明先生より戸津説法の御案内を頂き、令和三年八月二十一日から八月二十五日の五日間参加させていただきました。上野御住職が説法師としてお話しを頂き、大変ありがたい内容に、俗なる私の誠に良き教えとなり勉強をさせていただきましたのでお話しの一部を簡単に御紹介させて頂き

2年ぶり戸津説法 「互いの助け合いも大切」

天台宗
上野住職



「お経を読み写経する。一日一日の行いを一生懸命積み重ねていくことが修行だ」と話す上野住職

天台座主への登壇とされる戸津説法が2日、80人を前に説法師の上野

れ、「縁はどこにでも転がっている。生かすかどうかは自分自身にかかっている」と強調した。昨年は新型コロナウイルスの影響で1877年分りに中止されたが、伝教大師1200年大遠忌の今年に説法を絞って実施。初日の説法には森川宏俊座主をはじめ宗内の要職者、天台寺門宗総本山園城寺の福家俊彦長吏らが耳を傾けた。上野住職は「本来は去年説法する予定だったが(1年延びて)大遠忌の年になり縁の深さを感じる」とした上で、「いろいろな縁が回りにあり、大切に生かせるかどうかによって人は変わっていく」と指摘した。

伝教大師最澄の忘言利

他の教えを引き、「草が生えているからといって人間は勝手にむしるが、草は自分が雑草だとは思っていない。雑草と思う人間には『草がある』と述べ、「自我ばかり通るうとするから世の中はバラバラになる。お互いがお互いを助けて同じ方向に進んでいくことが大切だ」と訴えた。

戸津説法は、伝教大師が両親への供養のため人々に法華経を説いたことにちなむ伝統行事で、8月21日から5日間、説法師が東南寺で法華経に基づいて講説する。勤め終えると天台座主に連なる経歴法階4位「望凝講」に選ばれる資格を得る。(須藤久貴)

- ①「何事にも修行に終わりは無い。『求道無限』それは梯子段を登るようなものでいきなり十段には登れません。一段ずつ上がって行かなければならないこと」。
- ②「縁を大切に生きなければならぬ」。
- ③「掃除により、見る(観る)目が養われる。だから掃除は大切である」。
- ④「幽霊的特徴的な姿の『おどろ髪』は、過ぎ去った過去に対する執着。『手の甲(陰)を前にした姿』は、叶いそうにない未来や願いを思い現実を見ている。そして地に足がついておらず常に浮いている。これらの三つのことを戒めなければならない。大切なのは『今』であると御釈迦様は教えておられます。それを『而今』と言うと教え頂きました。そして、最終日には『夢』を持つて生きる事の大切さを教えて頂き、大変心打たれ、私自身の人生に置ける大切な教えとなりました。

私の道場稽古の時に道場生にも早速上野先生の教訓をしっかりと伝えさせて頂きました。

武道精神を伝える為の大切な教訓として、私の気付きとしても生徒に今後もお話をさせて頂いたばかり考えております。

これからも私自身が学びを求め、少しでもお役にたてる武道人になれますように努力させて頂きます。今後とも宜しくお願ひ申し上げます。